

J・S・ミルにおける高次と低次の快楽をめぐる

景山 康次郎

「キーワード…①快楽 ②生の理論 ③ベンサム ④高次と低次 ⑤内的な動機」

はじめに

本稿では、J・S・ミル(John Stuart Mill, 1806-1873)における、高次と低次の快楽をめぐる解釈について論じていく^①。ミルは、著作『功利主義論』^②(一八六一年)において、快楽に質的な差があることを主張した。このことよって、ミルは、功利主義の「快楽のみが望ましい」という前提に、「ある種の快楽は他の快楽よりも優れている」という命題を加えた。彼の快楽に質的な差があるという主張は、さまざまな仕方でも解釈され、大きく二つの解釈がある。一方には、それはベンサム(Jeremy Bentham, 1748-1832)の主張を反駁するものだという解釈があり、他方にはベンサムの主張を補完することを意図したものだという解釈がある。前者は、

ミルが快樂の質的な差による価値判断を取り入れ、ベンサム の提唱した行為の価値を快樂の量的な大きさによって判断する量的功利主義を否定したと解釈する⁽³⁾。後者は、そもそもベンサム における快樂の考え方は、量的なものだけではなくミルの言う質的なものを包含するものであつて、ミルが快樂の質を主張したのは、ベンサム 理論への批判者からベンサム を擁護するためであつたと解釈する⁽⁴⁾。

本稿では、正反対の解釈を生じさせてしまうこのミルの主張を取り上げ、それとベンサム 理論との関連を考察する。ミルがベンサム 理論のどこを批判し、どこを継承したのか、を明らかにすることを目的にしたい。そのための方法として、ミルがベンサム の死後に発表した、論考「ベンサム」(一八三八年)⁽⁵⁾での記述に注目する。論考「ベンサム」は、ミルが初めて率直にベンサム 評を展開した論文であり⁽⁶⁾、その中でミルはベンサム 批判を行っていると同時に、その積極的に評価すべき点も記している。『自伝』(一八七三年)においてミルは、そこで述べたベンサム 評の内容を、(やや批判に傾き過ぎたとはしながらも)今でも完全に正しいと考えている、と記してすらいるのである。

本稿では、まず第一節でミルのベンサム 評がいかなるものであるかをまとめる。次いで第二節で、『功利主義論』における快樂の質の主張が、そのベンサム 評をどのような仕方 で反映しているのかを見極めたい。

一、ミルのベンサム 評

一― 論考「ベンサム」におけるミルのベンサム 評

ミルがベンサム について直接に論じたものは、「ベンサム 氏の訃報」(一八三二年)および「ベンサム の哲

学」(一八三三年)、そして先に挙げた論考「ベンサム」である。それらの中ではベンサムに対する批判と、積極的評価とが混在している。ここで指摘しておくべきは、ミルがベンサム評において決してベンサム理論を崩してしまふことを意図していなかったということである。ミルは、「ベンサムが認めておらず彼の哲学が考慮に入れなかった真理は数多くあるし、重要なものでもある」と指摘しながらも、「真理のうち彼が認めていた半分を、彼が残りの半分を見逃していたからといって退ける」事態に陥ることは誤りであることを強調しているのである(B, p. 64)。

それでは、論考「ベンサム」においてミルはベンサムのどのような点を高く評価しているのだろうか。要約するならば、以下の二点を挙げることができよう。

(一) 人間は快樂と苦痛にのみ従うものである、という非常に明確な「生の理論」に基づいて功利性の原理を定め、人間の行為の正不正を判定することに関して、事実と経験とに訴える包括的な帰結的原理を一貫して求めたこと。

(二) その快樂主義的功利主義理論から、實際社会での問題の解決を案出する方法においても一貫性と説得力を持った手段を提供したこと。

快樂と苦痛を善と悪として捉え、その善悪に従って正しさや不正が定まるという考えは古くはエピクトロスに見られ、また道徳の基礎をその功利性に置くという考えは、ヒュームやエルヴェシウスが先駆者である。ミルは、単にベンサムがそれらの考えを上手く引き継いだことを評価しているのではない。ミルのベンサム評価

(一)は、彼が功利性の原理を定めたことではなく、正不正を判定することに関して一貫して帰結的な快樂主義的方法を用いたことに対して向けられている。それは、「細分法 (the method of detail)」(B, p. 48)とミルが呼ぶものである。すなわち、「全体を部分に分けることによって、抽象的概念を事物に還元することによって——類と一般性を、それを構成している個体に分類することによって——取扱い、それを解こうとする前にあらゆる問題を細分化する方法」である。この方法は、「抽象概念は事実ではなく事実を簡約化して表現する方法であること、抽象概念を扱う唯一の実際的方法はそれらが表現している事実(経験的なものであっても意識的なものであっても)にさかのぼるものであること」という格率に従ったものである(B, p. 49)。ベンサムはこの方法を徹底して追求し、政治学や道徳論といった抽象的概念を扱う学問にまで厳格に適用した。ベンサムは殺人や放火、強盗などといったことについても、快樂と苦痛という事実へと還元することができるという裏付けなしには、それが有害な行為であるということを認めなかった。「人間の行為の哲学」にこの細分法を導入したことは、哲学におけるベンサムの独創であり、彼を偉大な改革者とした、とミルは評価し、肯定している。

ミルがベンサム理論を評価する次の点(二)は、その快樂主義的方法を実際問題の解決へと用いる積極的部分について向けられている。ベンサムの快樂主義的方法は、その観点に基づいて、あらゆる物事における一貫性の欠如や詭弁、矛盾や不合理などの誤りを指摘することを可能にした。しかし、それだけでなく、ベンサムが(一)において確立した方法は、単に誤りを指摘するだけでなく、その判定に用いる過程を逆に進むことで、代替案を提出することを可能にする。ミルは、ベンサムの「結論が引き出されることになった事実と観察の集まりは哲学の素材の一部として永久に残っていく」と述べており、事実と観察からいかに結論に至るかという

過程については批判をしていないのである(B, p. 47)。

これらの評価から、ミルはベンサム理論の大部分をそのまま受け入れていたと言える。他方で、ミルはベンサムが見逃した真理があると考え、ベンサムを批判している。

ミルはベンサムの方法を通じて提供される「その実際上の結論については退けるかもしれないし、そうしなければならぬことも多い」と言う(B, p. 47)。ミルによれば、ベンサムが理論の前提としている人間の「生の理論」に関する考えは、快樂と苦痛の源となる人間本性の構成要素のうちの自己愛や、他者への共感や反感といったものに限定されており(B, p. 65)、外在的および付随的な原因によらない、「内的」な「行為の動機」⁽⁷⁾が無視されている。そのため、ベンサムの理論は自らの「生の理論」によって十分に扱うことの出来る、外的、社会的な側面に関する議論については申し分ない結論を提出できるものの、内的な行為の動機に立脚した結論については実際に適用するには齟齬をきたす、というのである。

ベンサムは、人間に利己的な行為をしようとすることを思いとどまらせるだけでなく、利他的な行為にも導く動機として、四つのサンクシヨンの力——物理、政治、宗教、世論に起因する希望や恐怖——を挙げている。ベンサムによれば、人間はそれらサンクシヨンのよって行為するようさせられている(IMPL, p. 34)。ミルはそれに対して、人間をベンサムの考えたサンクシヨンの力なしに人間を道德的行動に導くものである、自身の涵養を目的とする「動機」が存在すると考えた。

「ベンサムは」、人間を、精神的完成を目的として追及することのできる存在として、すなわち自らの内的意識以外の源泉から生じてくる善への希望や悪への恐怖を抱くことなく、自らがもっている卓越性の基準

に自らの性格を合致させることと自体を望むことができる存在として認識することはけっしてなかった。

(B, p. 66)

ベンサム の道徳理論の一面性を導いている原因としてミルが考えているのは、四つのサンクションなど、人間的な「動機」からのみ人間の行動を解釈しようとするベンサムの考えである。そのような外的な「動機」からは独立した感情に関わる事柄に関する結論について、ベンサムはミルの納得のいく回答を提出していないのである。

ミルは、快楽主義的生の理論や方法論それ自体にも、また社会的領域への適用に関する議論にも、批判を加えてはいない。ミルは快楽を唯一の基準とすることに同意しながらも、ベンサムの快楽を感じる存在としての人間に対する理解が限定的なものであることを批判しているのである。

一―二 「コールリッジ論」におけるベンサム評

ベンサム評に見られる以上のミルの見解をより一層明確にするために、ここでコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) についてのミルの論評にも目を向けておこう。

コールリッジは、ミル自身その多大な影響を認めるロマン主義的思想家である。ミルは「コールリッジ論」⁽⁸⁾において、コールリッジが、イギリスの同時代の体系的思想家の中でベンサムに匹敵し、ベンサム理論の「相補う補完者」であり、「各々の長所が相手の短所に対応している」と評している。ミルによれば「コールリッジ論」は、ベンサム派である急進主義者や自由主義者に対して、彼らが知っておけば有益だと思われ

る点をとくに強調することに目的を置いたものであり⁽⁹⁾、それゆえ、この論評は、ベンサム理論を補完すべきものと考えていたミルが、いかにその補完を行うかということについての示唆を含んでいる、と考えられる。

ミルは、コールリッジの哲学の基礎をなす人間の知性と知識とに関する意見に対しては、否定的見解を示している⁽¹⁰⁾。しかしながら、彼の理論の説くところには「もつと十分な理解を与えるに値すると言わざるを得ないものが存在している」と述べる⁽¹¹⁾ (C, p. 167)。実際、ベンサムとコールリッジは「多くの場合に異なる材料を使用した。しかし、両者の材料はいずれも真実の観察の結果であり、経験の純正な産物」であった。それゆえ、彼らは、「同種類に属しながら互いに最も遠く離れているもの」にすぎないのであり、彼らの思索の「その成果は、結局は互いに矛盾するものではなくて互いに補完するものである」と考えてよいのである (C, p. 101)。

ミルはコールリッジの思想が、十八世紀の哲学に対する反動の所産であり、人間精神の反抗を表す保守的な思想である、と断言する。コールリッジは改革論者の攻撃的となつていくような伝統的な思想が受け入れられてきた背後には真理が含まれているに違いないと主張するが、ミルはこれに同意する。明らかにミルは、コールリッジの採用した材料がベンサム理論に矛盾しないと考えていたのだが、それら反発しあう二つの思想——改革主義的なベンサム理論と保守主義的なコールリッジ理論——が矛盾しないからといって、何らかの見地からそれら二つが一つの思想となる、とは考えていなかった。「他のすべての真実で適切な思想と首尾一貫するように精錬され陶冶されたとき」、「互いに両立しえないもののように見えていた思想が、実はただ相互の限界を要求しているにすぎないことが判明したとき」、「一つの思想は正しく評価される、とミルは言う (C, pp. 103-104)。それゆえ、ミルの考えでは、ベンサムが採用しなかったコールリッジの材料をベンサムに加えたう

えて、首尾一貫した理論を作ることは可能であり、その場合、二つの思想は新しい理論の中で互いの限界を示し、より適切な結論を導くのである。

このようにミルは、「コールリッジ論」においても、ベンサム理論の前提の狭さを批判的にとらえているのであり、したがってミルは、ベンサム理論をどのような仕方でも補完したらよいかについても貴重な示唆を与えているのである。

一―三 ベンサム批評に含まれるミルの主張

以上の論考「ベンサム」と「コールリッジ論」に見てきたことを踏まえ、ミルのベンサム理論に対する論評をまとめてみよう。第一に、ミルはベンサムのその功利主義の根幹である、帰結主義的な快樂主義的方法に関して、同意している。しかし、第二に、快樂がいかなる動機によって生み出されるか、言い換えれば、快樂は何によって構成されるかを問う段階で、ミルはベンサムとは袂を分かつことになる。この問いへの答えは、所与の前提から演繹的に導き出すことができるようなものではない。特定の快樂を前提として、そこから演繹的に分析を行うベンサム理論においては、その問いはそもそも立てられていないのである。ミルは、快樂と苦痛とが何によって構成されるかという問いに、外在的な動機のみを見出すのではなく、様々な内在的な動機もまた含まれているとしている点で、ベンサムと異なる主張をしている。とはいえ、ミルは快樂のみを内在的な善とする倫理上の立場、すなわち快樂主義を批判してはいない。むしろ、快樂主義を採用し、その観点から、ベンサムがそのような狭隘な理論を展開した事情に理解を示してすらいる。したがって、ミルは快樂主義をとりながら、快樂を生み出す内的動機に着目してベンサム理論を補完しようとしたと考えられるのである。

ミルによれば、ベンサムはミル自身が指摘したような、いくつかの人間本性の要素からたらされる快樂を認識していなかったわけではない。むしろ、「ベンサムの著作のどこかでその存在を認識されていないものはおそらくひとつもない」、と言う。しかし、「そうした認識に立脚している結論はひとつもない」のである。というのも、ベンサムにおいて、それらは単に「その人特有の嗜好 (idiosyncrasies of taste)」(B, p. 68.)とみなされたのである¹²⁾。彼が重視したのは、その人特有の嗜好によって引き起こされるかもしれない行為のうち有害なものを禁じることにあり、(当然ベンサムが把握した範囲の内におけるものであるが)あくまで人間本性のうちの、すべての人々に共通して快苦を生じさせ得る動機であった。それに対してミルは、ある人々にとつては快苦の源とならないものでありながら、また別のある人には紛れもない快苦の源となるような動機——これらは把握し難い人間本性の一部分をなす——も、行為の動機の一つとして加えることができると考えていたのである。

以上に見てきたように、快樂がいかなる動機によって生み出されるものであるかということに関して、ミルはベンサムが考慮しなかった点へと考察を広げ、理論の拡張を主張している。それゆえ、ベンサムの一面性への批判は、ベンサムの功利主義について、すなわち正不正の判定方法とその基準についてではなく、その判定の際に用いる材料を生み出す行為の動機には何が挙げられるのか、という問題にかかわるものなのである。

二、快樂の質について

二―一 ミルによる高次の快樂の説明

本節では、ミルにおけるベンサムとの大きな違いである快樂の質の主張について、『功利主義論』での説明を検討する。その検討を踏まえて、ミルの快樂の質の主張が、ベンサムの評価すべき側面、すなわち、その理論的方法や社会的道徳を継承するかどうか、またそれがベンサムにおける前提の狭隘さと結論の一面性を改善するかどうかを見ることとする。

ミルの快樂の質に関する記述は、「もつとも尊敬すべき感情や目的を持っている人々」(U2.3, p.55.)からの、功利主義の生の理論への批判に対する反論として登場する。それら尊敬すべき批判者たちは、人間は豚と同じ快樂だけを望むのではなく、快樂の他に望んだり追求したりするのに気高い対象があるのだ、と主張し、その生の理論を「豚にのみふさわしい」ものとして否定した。また他の批判者は、そもそも幸福は達成不可能なことからそれを目的とするような理論は成り立たず、なにより人間は幸福なしにもやっていける、と主張した。これらは、一般的なベンサム流の功利主義に対する批判であると考えられる。それは、快樂をすなわち幸福と捉え、種類による相違はなく、単にその量的大きさの点においてでしか差がないものとして扱い、その最大幸福を究極目的とする理論である。この批判は当然、ベンサムと同じく快樂主義的功利主義を主張するミル自身にもあてはまるものであるため、彼はそれに答える必要があった。

ミルが『功利主義論』において掲げる生の理論とは、どのようなものであろうか。それは「快樂と、苦痛か

らの自由が唯一の望ましいものである」という理論であり、「あらゆる望ましいものは（他のあらゆる体系と同じくらい数多く功利主義体系にあるのだが）それ自身に内在的な快樂によって望ましいか、快樂を増進させるか苦痛を回避する手段として望ましいとされる理論」（U 2.3, p. 55）である（傍点引用者）。ミルはこの生の理論、つまり倫理的な快樂主義を前提として、「ある種の快樂は他の快樂に比べてより望ましくより価値があるという事実を認めることは功利性の原理と完全に両立しうる」（U 2.4, p. 56.）と述べる。そして、快樂は量的評価だけでなく質的评价もなされるものである、と主張する。

ミルは「快樂に質の差があるということによって何が意味されるのか」という問いに対して、次のように回答する。「二つの快樂の両方を経験した多くの人々が、道徳的義務が導く感情とは無関係に、片方のものを明確に選び取ったとするならば、それがより望ましい快樂である」（傍点引用者）。そして次に、「量的に大きなものであることを別に、快樂それ自体としてみたときに、何がある快樂を他の快樂よりも価値あるものとし得るのか」（傍点引用者）、という問いに対しては、次のように回答する。「二つの快樂をともによく知る人が、その快樂を選ぶことで、多大な不満足を伴うことが分かっていたとしても、その快樂をもう一方よりはるかに高く評価して選び、そしてもう一方がどれほどの量で得られたとしてもその選択を放棄しないならば、比較の際に量がほとんど考慮されないほどに、その快樂の享受が質において優れているためであると考えてよ」（U 2.5, p. 56.）。

第一の回答によって、ミルは、二つの快樂の間でその質の差が認められるならば、望ましさにもまた差がある、ということを主張している。さらにここでは、質的に高次の快樂の判定は、道徳的義務が導く感情とは無関係になされることが条件として挙げられている。つまり、多くの人々が選択「すべきである」ために選択す

るものではなく、多くの人々によって自らが選択「したい」がために選択される快樂がより望ましい快樂である、とミルはここで述べている。第二の回答によって、ミルは、ときに量的な快樂よりも質的な快樂の方がその価値においてはるかに優れている、ということを中心して主張している。さらにここでは、質的快樂を享受することは、たとえそのことから満足を得られずとも価値がある、ということもまた主張されている。

以上のミルのそれぞれの回答は、一個人がいかに感じるか、ということを中心として問題としている。そしてその選択が、快樂それ自体を求めた結果であって、何らかの外的な制裁によるものではない、ということが強調されているために、快樂の質は何らかの内的、精神的快樂の源泉に関わる快樂を意味していることが分かる。

二―二 尊厳の感覚——高次の快樂を選択する動機の説明——

続けて、「どちらと同じくらい知っていて、どちらも同じように評価し享受することが出来る人々が、自らの高次の能力を使用するようなあり方 (*manner of existence which employs their higher faculties*) をはつきりと選び取るということは疑いようのない事実である」とミルは述べる (U 2.6, p. 56)。たとえば「獸の快樂が最大限与えられると約束されたとしても、下等な動物へと生まれ変わることと同意する人間はほとんどいないだろう」とし、有能な人々は、無能な人々の方が自らの運命に満足していると説得させられたからといって、自らの能力を放棄するのに同意しないだろうからである (U 2.6, pp. 56-57)。ここでは、結果として得られる快樂がいかに大きなものであっても、行為者はその「自らの高級な能力を使用するようなあり方」を選択する、と考えられている。また、この「あり方」を目指す感情、その「あり方」より劣ったものになることを望まない感情、こうした躊躇の気持ちなどをミルは「尊厳の感覚」と称する (U 2.6, p. 57)。この感覚は、あらゆる人間が何らか

の形で持っているものであり、高次な能力にある程度比例して強まるとされる。そして「尊嚴の感覺」が強まれば強まるほど、その感覺と衝突 (conflict) するような快樂は、どれほどの量を受け取ることができようとも、一時的な場合を別とすれば、望むに値する対象たりえないものであるほどにその人の幸福と関わるものであるとミルは主張する。つまり、この「尊嚴の感覺」は、高次の快樂を受け取ることによって快樂を生じさせる源であり、高次の快樂を選択する原因である。そして同時に、低次の快樂を受け取ることによって、受け取れば受け取るほど、自らが低次な存在へと堕ちてしまうということ、つまり、自らが望まない状態に陥ってしまうという苦痛の源であり、その苦痛を避けさせる原因である。すなわち、ミルは「尊嚴の感覺」を「行為の動機」として考えていることが分かる。

以上のように、ミルの説明によれば、質的なものとされる快樂が具体的に何であるかということとは、その能力や「あり方」によって異なるためにリスト化することは難しいものである。しかし、その高次の快樂を選択することの原因は、あらゆる人がその能力や「あり方」に従った形で持っている「尊嚴の感覺」という一つの動機——ある人々にとっては快苦の源とならないものでありながら、また別のある人々には紛れもない快苦の源——に求められるとミルは考えている。すなわち、質的快樂は、「その人特有の嗜好 (idiosyncrasies of taste)」ではなく、すべての人々が共通して持つ多様性に富んだ形の「内的動機」から求められるものである。このことから、ミルは、ベンサム理論に当てはまる形で質的快樂を説明していると言える。

二―三 ミルとベンサムの違い

ミルが持ち込んだ快樂の質の差は、ベンサム理論では語られることのなかった側面ももっている。それは、

高次と低次の快楽の識別と選択は、それを快楽として認識する能力の有無に依存する、とミルが考えている点である。この能力というのが指しているものは、様々な分野に向けられるものとして考えられていることは間違いない。つまり、何に対する能力が高いか（あるいは低いか）によって、質的快楽の選択もまた変わるといふことである。例えばミルは詩を好んでいたが、ベンサムは音楽を好んでいた。ミルはこのことのどちらが正しいか、ということには触れていない。しかし、ミルはそれらがどちらも快楽であり、その人の「あり方」として、「動機」となることを主張しているのである⁽¹³⁾。それゆえ、ミルは、さまざまに興味が入る人々に快楽をもたらすと考える点でベンサムと同意見であるが、人々にとつて高次の趣味と低次の趣味とが存在する点指摘する点でベンサムと異なっているのである。

以上のことを整理すると、ミルの言うところの快楽の質についての考慮とは、人々が快楽それ自体をみたとき、ある種の快楽を選択するのであれば、そこに何らかの差をもたらす原因が存在するということを認め、次にその原因を含めた上で快楽や苦痛などの結果を考慮する、という過程を踏んでいるものであることが分かる。それゆえ、ミルにおいて、人間と動物の違い、または人間と人間の違いは、ある快楽を快楽として認識する本性がどれだけ多様であり、またどれだけ発達しているかの違いにある、と言える。それは可変的なものであるために、絶対不変の境界ではないのである⁽¹⁴⁾。しかし一方で、この能力に従った内的な動機の説明は、能力が同程度の人々の間では同じような高次の快楽や苦痛を生むだろうことを想定できることから、高次の快楽が一般化される可能性——単なる一個人の好みや嗜好としてではなく、最大幸福の一要素として考慮されること——が示唆されているのである。快楽の質の主張は、功利主義の生の理論では人間と動物を区別できないという反対論者に応えるだけでなく、第一節で確認したミルのベンサム批判である、特定の「動機」や、外的な

「動機」のみを行為の動機として認めるといふ理論の前提の狭隘さを改めたものであると言える。

二―四 最大幸福と質的快樂の選択

最後に、質的な快樂における正しさが、量的快樂による正しさよりも優先されてしまうことがないかどうか、つまり、ミルがベンサムの評価点を自ら押しつぶすような誤りを犯していないか、ということ考察しておく。ミルは快樂の質の差の決定について、次のように述べている。

さまざまな感情にとって快いのはどちらかという問題について、両方を知っているゆえに判断する資格を持つている人たちの意見が、あるいは彼らの間に不一致があるならば多数者の意見が、最終的なものとして認められなければならない。(中略) 一つの苦痛のうちどちらがより激しいかを判定したり、一つの快い感覚のうちどちらがより強いかを判定したりするのには、両方をよく知っている人々による全般的な意思表示の他にどのような手段があるだろうか。苦痛も快樂も均質的なものではなく、苦痛はつねに快樂とは異質のものである。ある特定の苦痛を受けてまである特定の快樂を獲得する価値があるかどうかを決めるものは、経験者の感情と判断力以外にあるだろうか。それゆえ、高次の能力とは結びついていない動物的本性によって得られる快樂よりも高次の能力から引き出される快樂の方が、その激しさという点では別に、経験者の感情と判断力が種類として選ぶに値すると示しているときには、それは同じように尊重されたいべきである。

(U 2.8, pp. 58-59.)

右の引用にもみられるように、功利主義において善悪として定義される快樂と苦痛は、あくまで経験によって判断されるものである。そのため、質的な快樂がいかに素晴らしいものであったとしても、行為の不正の判断に際してそれを感じることはできない他者を無視してはならないのである。言うまでもなく、功利主義において、行為の不正を定める基準を構成している幸福とは、行為者自身の最大幸福ではなく、関係する者すべての最大幸福である。ミルはこれを理由として、質的な快樂の考慮は「功利主義的基準を受け入れるための不可欠な条件では決してない」(U 2.9, p.59)と断っている。この断り書きには、説明が必要である。ミルは、二章十九節において、行為の規則と行為の動機との関係を説明し、その注において関連する説明を与えている。

あらゆる行為の唯一の動機は義務の感情でなければならぬとするような倫理学の体系はない。それどころか、私たちの百のうち九十九の行為が他の動機からなされており、義務の規則がそれをとがめないならば、それは正しくなされていることになる。(U 2.19, 65)

ここでミルは、快樂の質の選択が、その最大幸福という究極的目的に従う限りにおいては、考慮に値するものである、と主張しているのである。しかし、同時にミルは、人々が正しい行為を行うか不正な行為を行うかということは、動機ではなくその意図に左右されるとも主張し、動機と意図とを明確に区別すべきものであると主張する。溺れる人を助けることを例にしてミルは次のように説明する。例えば、溺れる人を救助した後に殺すために助ける行為と、善意や義務から救助する行為との違いは、その動機だけではない。「行為の道徳性は行為者の意図によって、すなわち行為者が何をしようと思志しているかによって左右される」(U 2.19, p. 65)。

溺れる人を助ける人は、動機が義務であろうと報酬への期待であろうと、「溺れる人を助ける」ことを意図している限り、道徳的に正しい行為をしている。信頼してくれている友人を裏切る行為は、その目的がより大きな恩義を受けている他の人のためであったとしても、「友人を裏切ること」による危害が意図されているために罪を犯しているのである。

ここでの説明において、ミルは明確に快樂主義に則ってベンサムの道徳の社会的側面を継承している。ミルは、快樂には序列があり、質的考慮によってその序列を認識し、その序列に従って人間は高次の快樂を選択すべきであるとは主張していない。正しさの判定において、質的に高次の快樂を追及することは、快樂の量よりも優先されることはないのである。ただし、質的に高次の快樂の源となるような動機は、それが行為の道徳性に何ら違いをもたらさないとはいえ、「行為者の価値に大いに関わる」とミルは言う(D.219, p. 65)。すなわち、正しい行為を促進するような場合に見られる動機を助長し、不正な行為を促進するような場合に見られる動機を抑制することになるのであり、その人自身が人々の利益を促進する傾向を持つ、ということを示すことになのである。また、快樂の質の考慮は自分の幸福と他者の幸福との違いを認識する場ともなり、正しい行為とは何かという判定に関する微に入り細を穿つような議論を促進するだけでなく、ある行為が正しかったのかどうかを判定する際にも独断的な判定を避けることに貢献するとも言える。ミルは快樂の質の考慮の主張によって、幸福が達成されないために幸福は目的として不適切だという批判に応えるだけでなく、論考「ベンサム」において批判した一面性の問題を克服しようとしたのである。

おわりに

このようにして、ミルは、快樂の質の主張に関して、論考「ベンサム」での評価と批判とを維持したのである。ミルは快樂の質の主張をしたが、それはベンサムと同じく快樂主義に則っており、また功利主義的な正不正の基準を快樂の量的な判定によって行うというベンサム理論も継承したものであった。それゆえ、『功利主義』において生の理論への批判者に対してミルが質の主張をしたことは、ベンサム理論の擁護であるという解釈は妥当である。他方、ミルはベンサム理論を拒絶したとする解釈は誤りである。しかし同時に、快樂の質の主張は、「それ自身に内在的な快樂によって望ましい」として把握されるものが人間の能力によって異なるために、その種類を定義していない。このことが、人々に受け取られる「それ自身に内在的な快樂によって望ましい」ものである快樂を限定したこと、その結論が一面的なものとなったベンサムへの批判、すなわちその解決についてのミル独自の見解を体现しているのである。それゆえ、ミルによる快樂の質の主張は、ベンサム理論に対する部分的な批判を含んでいる、という解釈が同時に成立する。ミルの質的快樂を含む功利主義理論は、量的な快樂を否定するものではなく、正不正の量的判定をもベンサムから継承したものである。同時に、それは快樂の量的正不正の判定を不服であるとして、別の道徳的見解を示す人々を、ベンサムのように誤った考えに基づいている功利主義理論の敵として退けることをしない。そうではなく、彼らを、他者と異なる快樂を享受することができ、それゆえにより大きな快樂を享受することの出来る人物たちとしてみなし、その快樂の享受が最大幸福に沿ったものである限り、外的な動機からではなく、内的な動機から道徳的行為を追い

求めることのできる、「もっとも尊敬すべき感情や目的を持っている人々」として扱う立場でもあったのである。

参考文献

- Bentham, Jeremy, *An Introduction to the Principles of Moral and Legislation*, ed. J. H. Burns, H.L.A. Hart, F. Rosen (New York: Oxford University Press, 2005). [「ベンサム『道徳および立法の諸原理序説』世界の名著四九』山下重一訳、中央公論新社、一九七九年、六九―二二〇頁。]
- Bink, O. David, 'Mill's Deliberative Utilitarianism', in *Mill's Utilitarianism: Critical Essays*, ed. David Lyons (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc. 1997).
- Donner, Wendy, *The Liberal Self: John Stuart Mill's Moral and Political Philosophy* (Ithaca, New York: Cornell University Press, 1991).
- Mill, John Stuart, 'Bentham', in *Mill in bentham and Coleridge*, ed. F.R. Leavis (London: Chatto & Windus, 1959). [「J・S・ミル『ベンサム』功利主義論集』川名雄一郎・山本圭一郎訳、京都大学学術出版会、二〇一〇年、九五―一八〇頁。]
- , 'Coleridge', in *Mill in Bentham and Coleridge*, ed. F.R. Leavis (London: Chatto & Windus, 1959). [「J.S.ミル『ロールリッジ論 柏經學訳』J・S・ミル初期著作集四』杉原四郎・山下重一編、御茶の水書房、一九九七年、三一―二六頁。]
- , *Utilitarianism*, ed. Roger Crisp (New York: Oxford University Press, 1998). [「J・S・ミル『功利主義論』功利主義論集』川名雄一郎・山本圭一郎訳、京都大学学術出版会、二〇一〇年、二五七―三五四頁。]
- Rosen, Frederick, *Classical Utilitarianism from Hume to Mill* (New York: Routledge, 2003).
- J・S・ミル『ヒューウエルの道徳哲学』功利主義論集』川名雄一郎・山本圭一郎訳、京都大学学術出版会、二〇一〇年、一八一―二五四頁。
- J・S・ミル『ミル自伝』村井章子訳、みすず書房、二〇〇八年。
- ジョン・グレイ、G・W・スミス編著『ミル『自由論』再読』泉谷周三郎・大久保正健訳、木鐸社、二〇〇〇年。

注

- (1) 本稿は第四一回インター・ユニ哲学研究会において発表した内容に手を加えたものである。
- (2) 本稿で用いたテキストは、Mill, John Stuart, *Utilitarianism*, ed. Roger Crisp (New York: Oxford University Press, 1998).である。引用または参照箇所を示す際は、該当箇所の直後に括弧書きで、次のように表記する。『功利主義論』をUと略記し、該当章と段落、該当頁を算用数字で表記する。引用箇所の訳出は、原則として引用者によるが、一部以下の邦訳を参照した。『功利主義論集』川名雄一郎・山本圭一郎訳、京都大学学術出版会（二〇一〇年）。
- (3) Blink, O. David “Mill’s Deliberative Utilitarianism”, in *Mill’s Utilitarianism: Critical Essays*, ed. David Lyons (Lanham: Rowman & Littlefield Publishers, Inc. 1997). プリンクはミルが一貫して快樂主義を否定したことをその論文で主張する。
- (4) Rosen, Frederick, *Classical Utilitarianism from Hume to Mill* (New York: Routledge, 2003). ローゼンはその第十章 ‘J.S. Mill’s Hedonism’において、そもそもベンサム理論における快樂の議論の中にはミルの言う質的な快樂も含まれているのであって、ミルの質的快樂の主張はベンサム批判ではなく、カーライルの功利主義批判に対する反論であると主張する。
- (5) 本稿で用いたテキストは、Mill, John Stuart, “Bentham.” *In Mill in bentham and Coleridge*, ed. F. R. Leavis (London: Chatto & Windus, 1959).である。引用または参照箇所を示す際は、該当箇所の直後に括弧書きで、次のように表記する。論考「ベンサム」はBと略記し、該当頁を算用数字で表記する。箇所の訳出は、原則として引用者によるが、一部以下の邦訳を参照した。『功利主義論集』川名雄一郎・山本圭一郎訳、京都大学学術出版会（二〇一〇年）。
- (6) ミルの父ジェームズはミルに絶対的な影響を持っていた。そのため、父が一八三六年に死去するまでの間は「どんな場合であれ自分の考えを完全にありのままに表明するのは心苦しく、まして父が寄稿する雑誌の誌上では、できるはずもなかった」と、ミルは告白している。『ミル自伝』一七三―一七四頁。
- (7) ベンサムは『道徳および立法の諸原理序説』の第十章において (PPML, pp. 96-99.)、動機は必然的に行為と関係

- するものであり、内的な動機は何らかの快樂と苦痛を生み出すものであるため、結果がどのようなものであれ、それ自体として快を含むものである、と述べている。それゆえ、それらはミルの言うところの人間本性の要素とも言い換えられる。ミルが論考「ベンサム」でベンサムが考慮しなかったものとして挙げている人間本性の要素は以下のものである。完全性への欲求や良心、尊厳の感覚や、それ自体を理想的目的とするような美や調和への愛、意志を実現させる力や行為への愛、等々。これらは自己利益への直接的な欲求ではなく、それ自体として望まれる快樂であり、間接的に他の快樂が期待されるために行為を促す動機である (B, pp. 67-68.)。
- (8) 本稿で用いたテキストは、Mill, John Stuart, "Coleridge," in *Mill in Bentham and Coleridge*, ed. F. R. Leavis (London: Chatto & Windus, 1959), である。引用または参照箇所を示す際は、該当箇所の直後に括弧書きで、次のように表記する。「コーリッジ論」はCと略記し、該当頁を算用数字で表記する。引用箇所の訳出は、以下の邦訳を参照した。『J・S・ミル初期著作集四』訳川名雄一郎・山本圭一郎編、御茶の水書房（一九九七年）。
- (9) 「コーリッジ論」の中で、ミルはベンサム派の人々を文明の礼賛者、啓蒙的急進主義 (enlightened radical) もしくは啓蒙的自由主義者 (enlightened liberal) と位置づけ、コーリッジをそれに対立するものとして、独立の礼賛者、その学派の人々を保守主義者、(一八世紀の哲学に対する) 反動学派と位置付けている。(C, p. 102.)。そして両者はたがいに異なる視点から一つの物事を見ているがために相いれないものとなっているだけであり、互いに相手の理論を完全に否定することを戒めている。
- (10) ミルは様々な哲学の基礎となる人間の知識と認識に関する問題に関して、(ミルの理解によれば) 先験主義的なコーリッジの意見は誤っており、ロックおよびベンサムの学派に正しさがある、と自らの立場を明確にしてる。(C, p. 114.)。
- (11) 『自伝』では、「新旧を問わずどんな思想も、擁護する立場に立つて吟味すべきだ」、「誤った思想でも、根底には一抹の真理が隠されているかもしれない。そうでなくとも、誤った思想を一見正しくみせている要因を発見できれば真理に一步近づくことになるのだから、やはり吟味が必要ではないか」と記し、より強く反対論者への理解の必要を説いている。『自伝』一一〇頁。
- (12) 一般にベンサムは快苦の量にのみ関心があったように思われているが、『道徳および立法の諸原理序説』の第六章二十九段落において、精神構造の違いによる快樂の受け取り方の違いを認めている。そしてこの違いについ

て感受性の質または傾向と名付けている。しかしベンサムは、そのように異なつて受け取られる快樂の存在を認めながらも、そこに何か人と異なる源泉が存在する可能性を考えず、単なる快樂に関わる諸事情の一つとして処理する以上に議論を進めていない。(IMPL, p.62)。

- (13) 論考「ベンサム」で、「快の量が同じであるならば、プッシュピン遊びは詩と同じくらい善いものである」というベンサムの言葉が紹介されている。ミルによれば、ベンサムは「言葉は正確な論理的真理以外のものを表すために用いられているときには、その本来の任務から逸脱」していると考えていた。それゆえ、ベンサムがこの言葉を用いたのは、「あらゆる詩は虚偽の陳述である」と考えていたからであり、「彼がもつとも重視し賞賛していたものについて同じように述べたであろうことを逆説的な仕方ですべてだけである」と言う。すなわち、詩は本来の言葉の用法から外れた言葉遊びであり、その他の遊戯と変わらないとベンサムは考えていたとミルは言うのだ。一方で、ベンサムは音楽を生涯愛好し、絵画や彫刻など視覚に訴える美術に関しては何の知識も感動も持っていないが、重要な社会的目的のための「手段」としては認めていた、とミルは言う。このことはつまり、快の量が同じであっても、プッシュピン遊びと音楽、プッシュピン遊びと絵画の間の善さには差がある、ということとベンサムは個人的な見地においては認めたであろうことを示唆している。しかし、ミルはベンサムが「人間の性格のより深い動因について無知であった」ので、それらが「道徳性や個人の教育にどれほど深く関わっているかに気付かなかつた」と指摘している。ベンサムが限定された前提に基づいて外的要因からのみの判断に偏っていたことをここでも批判しているのである(B, p.95)。

- (14) 例えば、生後間もない赤ん坊よりも訓練された馬や犬の方が理性的であり意志疎通が可能である。このことから不正について、問題は快苦を感じることができるかであり、理性を働かせることができるかでも話すことができるかでもない、として動物と人間を区別せず、動物愛護もまた正しい行為であると主張したベンサムにミルは同調している。しかしミルはここからさらに発展させ、人間と動物との区別もまた快樂によつて説明されるのであり、より多くの種の快苦を感じることができる、という点に求めた所でベンサムと異なるといえる。(「ヒューウェルの道徳哲学」『功利主義論集』二二七—二二八頁)。

J. S. Mill on the higher and lower pleasure

KAGEYAMA, Kojiro

John Stuart Mill claims that there are higher and lower pleasures. Although this claim is an essential part of his utilitarian thought, it is disputable. Putting it simply, there are two interpretations of the claim. On one interpretation, Mill offered a refutation of Bentham's theory of utilitarianism. On the other, Mill advanced a general scheme which was to complement Bentham's utilitarianism. Those who put forward the former interpretation argue that Mill's claim is incompatible with Bentham's quantitative utilitarianism, and that he also tried to reject it. Those who advance the latter interpretation claim that Bentham's own theory did not fail to appreciate the different qualities of pleasures, while Mill also intended to defend Bentham's theory from its detractors.

This paper takes up this interpretive dispute relating to Mill's claim, and seeks to examine Mill's relationship to Bentham's theory. The purpose is to clarify what part of Bentham's utilitarianism Mill criticized, and what part Mill actually took over. To achieve this, I will first pay close attention to Mill's assessment of Bentham's theory, and try to shed new light on Mill's position. In particular, I will focus on Mill's essay entitled 'Bentham'. This essay contains the first, straightforward statement of Mill's own view about Bentham. In his *Autobiography*, Mill says that 'Bentham' contains a perfectly just criticism of his theory though it may be a little too harsh at times. This essay offers a key to the understanding of the real difference between Mill and Bentham. After clarifying what Mill says in 'Bentham', I will go on to examine Mill's claim of the different qualities of pleasures and see how Mill's assessment of Bentham's theory is reflected in *Utilitarianism*.

